

開会挨拶 有光 秀行（東北大学附属図書館副館長／文学研究科教授）

本日はみなさま、ご参加くださり、ありがとうございます。

シンポジウムの開会に際し、ひとことご挨拶を申し上げます。

最初にこのイベントのタイトル「東北大学狩野文庫デジタルアーカイブシンポジウム『江戸に遊び、江戸に遊ぶ』」に関して、まず「狩野文庫」とは何か、「東北大学」および「江戸」とのつながりはどうか、お話しいたします。

今月12月9日は、夏目漱石の命日でした。そしてこの日、東北大学附属図書館のツイッターは、漱石の葬儀で読まれた弔辞の、下書き原稿の画像を公開しました。この弔辞を書き・読んだのが、漱石の友人・狩野亨吉博士でした。狩野博士は教育者として、また学者としても、近代日本におおきな足跡をのこしました。そして「狩野文庫」は、この狩野博士が集めた蔵書です。これは、2点の国宝をはじめとする約10万8000点という膨大な、そして貴重な資料からなっております。その内容は「古典の百科全書」と言われるほどヴァラエティに富み、「ほとんど文化のすべての方面にわたってこれを網羅し」（村岡典嗣）、かたよりがないとされます。また明治以前の和書がその多くを占めております。「江戸学の宝庫」という評言は、以上のような「狩野文庫」の性格を、端的に表していると思います。

「狩野文庫」は今から100年ほど前、狩野博士の生前より、何度かに分けて、東北帝国大学に売却され、いまの東北大学に引き継がれました。そして、その豊かな内容から、全国の人文系研究者を、この仙台の地にひきつけて参りました。

つぎに本日のタイトルの、もうひとつのキーワードであります「デジタルアーカイブ」について述べます。

日進月歩で進展するデジタル化の波は、資料を読みとくことを基礎に置く、人文学の世界にも及んで久しいです。私は西洋中世史を専門に研究しておりますが、日本では読めなかった西洋の古い刊行物や、中世の写本まで、コンピュータのディスプレイ上で閲覧可能なものが増えております。

日本でも 5 年以上前から、このイベントの共催者である国文学研究資料館が中心となり、東北大学も参加して、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」のもと、国際的、あるいは学際的な研究網の構築と、資料のデジタル化とがすすめられて参りました。この事業において、さきほど紹介した狩野文庫のデジタル化と公開とがおこなわれつつあり、本年 2020 年 9 月には、その第一弾として、232 点の貴重な和書資料が一般公開されました。さきほど狩野文庫が、「全国の人文系研究者をこの仙台の地にひきつけ」と申しましたが、いまや研究者以外の人々でも、さらにインターネットが利用可能な環境ならば、全世界から、この文庫を利用できる環境がととのっていくわけで、これを画期的と言わずして何を言おうという気がいたします。

さて、編集者であり著述家の松岡正剛氏は、狩野博士を、「近代日本人のなかで、器量が大きく、破格で、とてつもなく面妖で、かつ最も高潔だった文人」と評しています。「破格で、とてつもなく面妖」という評価は、「狩野文庫」のイメージにも通じるかもしれません。今回デジタル公開された資料の目録を見ると、その多くは料理に関係するものです。「四季献立式（しきこんだてしき）」、「砂糖製作記」、「田舎料理」、「四季漬物・塩かげん」、「素人包丁」などなど。旧制一高校長、京都帝国大学文化大学学長、江戸時代の思想家の発掘者と言った、狩野博士のお堅いイメージと一見結びつきにくい、料理の書名が多々並んでおります。そして、これが文庫全体の、わずか 0.2%ほどなのです。「破格」で「面妖」な狩野文庫および、そこから浮かび上がる江戸の世界、さらには人文学の将来の姿を、限られた時間ではありますが、これから皆様とご一緒に楽しみたいと思います。

以上をもちましてご挨拶といたします。